貴重書紹介

貴船の本地

石川（いしかわ）　透（とおる）
（文学部教授）

『貴船の本地』（請求記号：132X@214@3）絵巻は，現状三軸であるが，本来は上下二軸で制作された（図１）。中身を見ても分かりにくいが，本来の上巻末尾には，絵草紙屋小泉と思われる朱印が押してある（図２）。下巻末尾には，印記があったと思われる場所が消されている。このように，絵巻として不遇な作品でありながら，制作時の印記を有する重要な作品であることを解説したい。

本絵巻については，二十数年前に某所で閲覧の機会を得て，簡単な書誌的報告を「絵草紙屋小泉の印記」と題して行った[1)]。その論文にも記したが，この『貴船の本地』絵巻は，以前から慶應義塾図書館が所蔵している『ともなが』絵巻（請求記号：132X@56@2）と酷似しており，両者ともに絵草紙屋小泉の制作と考えられるのである。

『ともなが』については，天下の孤本として，古くからその翻刻は刊行されていたが，それらの書誌解題を見ても，押されている印記については，触れられていなかった。おそらくは，印記の一部の文字が難解で取り上げることができなかったのであろう（図３）。ただし，その絵巻としての豪華さは，慶應義塾図書館が所蔵する絵巻の中でも指折りの作品であったから，拙著『慶應義塾図書館蔵　図解御伽草子』（慶應義塾大学出版会，2003年）に，全ての挿絵をカラーで掲載した。その図版や，慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクションの画像[2)]を見れば，絵巻の特徴がよく分かる。

この『ともなが』と『貴船の本地』は，両者とも，本来上下二軸の絵巻物である。挿絵の数は，各巻八枚ずつであるということも共通するが，両者とも挿絵で各巻が終わるということも共通している。基本的に絵巻物は，ほとんどの作品が，詞書本文から始まり，終わりも本文で終わるものであるから，珍しい共通項となる。

その本文の文字は，明らかな同筆で，これらは，朝倉重賢の筆跡である。朝倉重賢については，拙著『奈良絵本・絵巻の生成』等に記したように，生没年等は明らかにできていないが，奈良絵本・絵巻の筆耕（本文の筆者）の一人で，最も数多くの絵巻の本文を書写した人物である[3)]。現在五点ほどの絵巻の末尾に，その署名が見られる。

本文が同筆というだけではなく，その挿絵についても，『ともなが』と『貴船の本地』は酷似している。両者ともに，いわゆる化け物が登場する作品であるが，その描き方もよく似ている。『貴船の本地』の方には，「土佐将監光起筆」の貼紙があるが，この著名な絵師の名前は，にわかには信じがたい。ともかくも，それぞれの最後の挿絵の左下に朱色の印記が存在しているのである。

その印記は，「小泉」「蔵宝蔵・七左衛門尉・安信」と書かれている。このうち，「蔵宝蔵」の文字の読みが難解で不明なのであるが，これは，個人を特定する見地からは，あまり重要ではない。おそらくは，「小泉七左衛門尉安信」という人物の印記なのである。残念ながら，検索して簡単に出てくる人物ではない。二十年ほど前までには，おそらく誰も取り上げたことのない人物であったのである。

だが，同じような絵巻末尾の印記については，別種の印記についての報告は存在していた。それは，「城殿」「城殿和泉掾　草紙屋　藤原尊重」の印記を有する絵巻が四点と，ほぼ同じ情報を箱に記した絵巻一点の報告であった。その後，箱書きの絵巻二点の報告が追加されたのだが，この二点は同じ内容を記したもので，これらは，「城殿和泉掾藤原尊重」という「草紙屋」を経営していた人物の印記と箱書きであったと考えられる。この人物も不明な点が多いのであるが，「城殿」という京都の店は，室町時代には扇屋を経営し，江戸時代中期には紙を扱う店の名前として記録に出てくる。このようなことから，扇を制作していた店が草紙屋として絵巻を制作していたことが考えられたのである。

実は，この「城殿」が制作した絵巻の多くを，その本文を朝倉重賢が執筆していたのである。ということは，朝倉重賢という筆耕は，「城殿」にも雇わ

れ，「小泉」にも雇われていたことになる。「城殿」と「小泉」の絵巻は，同じ本文の筆跡であっても，挿絵部分の描き方や全体的なスタイルがかなり異なっていることから，明らかに別の店である。おそらくは，同じような豪華絵巻を制作する店として，ライバル関係であったと思われるのであるが，本文については，同じ人物を雇っていたのである。

では，「城殿」にしろ，「小泉」にしろ，いつ頃に存在した絵草紙屋であったのであろうか。朝倉重賢自身の生没年は不明であるが，朝倉重賢の本文筆跡を持つ絵巻の挿絵に，海北友雪（1598～1677年）の落款を有するものがあったり，朝倉重賢の執筆した絵巻が，浅井了意（？～1691年）が筆耕を担当した絵巻とよく似ていたりすること等から，江戸時代前期，十七世紀半ばから後半にかけて活躍したことが分かっている。とうぜん，「城殿」や「小泉」といった店も，その頃に存在したことが分かり，『貴船の本地』絵巻も，江戸時代前期の制作であると推定できる。

この「小泉」という店の印記については，『貴船の本地』の印記以外のものも存在している。個人蔵『七夕の本地』絵巻には，巻末に「源小泉　大和大極」「烏丸通桜馬場町　御絵双紙屋　大和大極」の朱印があり，「小泉」という絵草紙屋が烏丸通にあったことが分かる。この印記は，國學院大學図書館蔵の奈良絵本『住吉物語』にも見られる。

さらには，慶應義塾図書館蔵奈良絵本『七草ひめ（帙題 若菜の草紙）』（請求記号：110X@314@1）[4]は，本来三冊本の内の上巻に相当するが，その下巻に当たると考えられる『つきわか物語』の末尾には，「御ゑさうし　天下一　小泉やまと」の印記があり，内容から見て，これも絵草紙屋小泉の印記であると考えられる[5]。『七草ひめ』『つきわか物語』と題されている作品は，奈良絵本でも，特大横型というたいへん珍しい形である。この大きさの作品はきわめて珍しく，どれもよく似た特徴を持っている。おそらくは，特大横型という特殊な奈良絵本自体が，絵草紙屋小泉の作品ではないか，と考えられる。

以上のように，絵草紙屋小泉と思われる印記は少なくとも三種類存在している。そのわずかな情報からだけでも，京都の烏丸通りに存在したこと，豪華な絵巻や奈良絵本を制作していたことが分かる。その活動期は江戸時代前期であり，奈良絵本・絵巻の世界では，草紙屋城殿と並ぶブランド店であったろうことが想像できる。

『貴船の本地』は，絵草紙屋小泉が江戸時代前期に京都において制作した作品であることが明らかになったが，最後に，その物語の内容を記しておく。

寛平法皇の頃，大臣の子定平の中将は，つぎつぎと五百六十人の女を迎えるが満足いかない。ところが，法皇から賜った扇に描かれている女に恋をし，この女より美しいという鬼国の大王の姫と会いたいと思う。鞍馬の毘沙門天で祈願すると，告げがあり，姫と会うことができたが，姫は鬼国で父に殺されてしまう。やがて定平は，姫の生まれ変わりである女子を育てて夫婦となり，後に貴船大明神となった。

なお，この『貴船の本地』絵巻は，2023年10月に丸善丸の内本店で開催された第35回慶應義塾図書館貴重書展示会「へびをかぶったお姫さま」展に，同じ印記を持つ作品群と共に展示された。その際に刊行した図録[6]や，録画されたギャラリートーク[7]を参照願いたい。

参考文献

1）石川透．“絵草紙屋小泉の印記”．奈良絵本・絵巻の生成．東京，三弥井書店，2003. 8.　p. 407-414.

2）慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション．“ともなが　2巻（奈良絵本・絵巻コレクション）”．https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/naraehon/132x-56-2-1
https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/naraehon/132x-56-2-2

3）石川透．“第三編　朝倉重賢筆奈良絵本・絵巻類”．奈良絵本・絵巻の生成．東京，三弥井書店，2003. 8.　p. 210-317.

4）慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション．“[七草ひめ] 3巻　存巻上（奈良絵本・絵巻コレクション）”．https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/naraehon/110x-314-1

5）石川透．“慶應義塾図書館蔵『若菜の草紙』の周辺：附解題・翻刻”．野鶴群芳：古代中世国文学論集．東京，笠間書院，2002. 10.　p. 403-420.

6）慶應義塾図書館．へびをかぶったお姫さま：奈良絵本・絵巻の中の異類・異形（第35回慶應義塾図書館貴重書展

示会）．東京，慶應義塾図書館，2023，125p.

7）KeioMitaLibrary（慶應義塾図書館），石川透．“20231006「へびをかぶったお姫さま」ギャラリートーク”．YouTube.
https://www.youtube.com/watch?v=dEmgfetuBiA

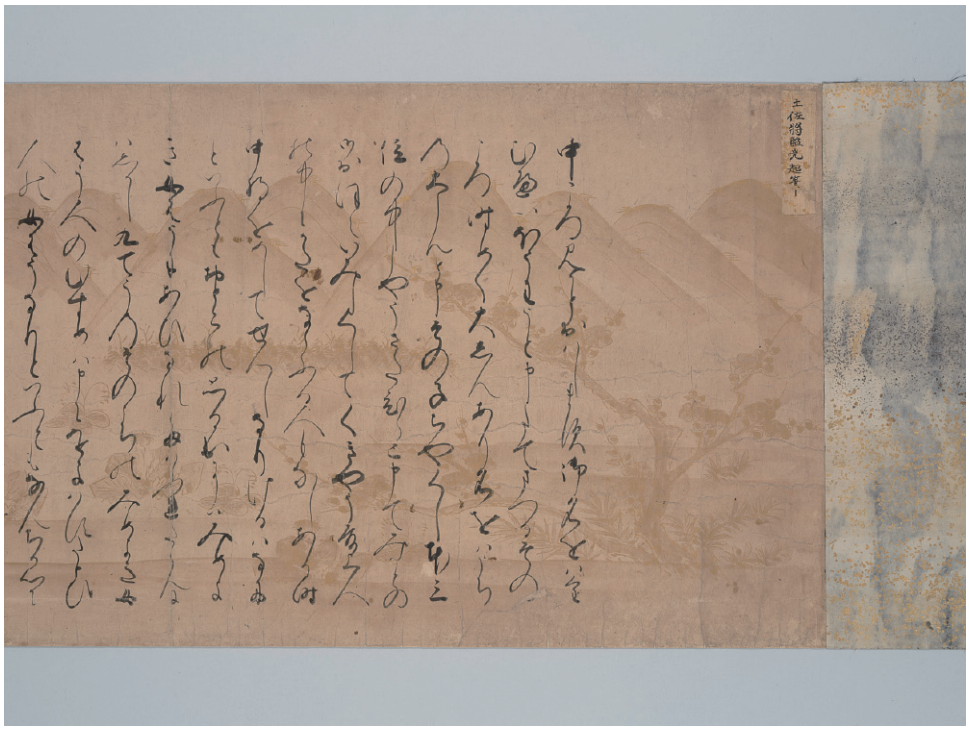

図１　「貴船の本地」上巻冒頭

図２　「貴船の本地」印記

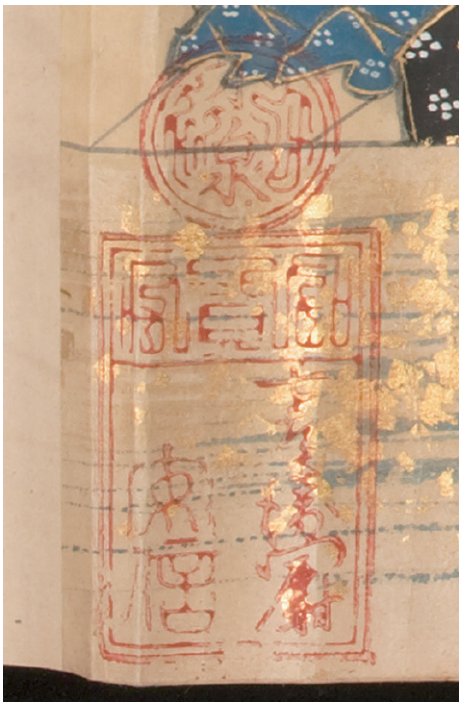

図３　「ともなが」印記